座談会

新課程では学校としての組織力が試される

2012年度、高校において数学・理科で新課程が先行実施となる。入学生は既に中学校で新課程の数学・理科を学んでおり、内容量の増加による学力差が予想されている。高校ではどのような準備が必要で、受け入れた生徒をどのように育てていくべきなのか。進路指導経験の豊富な3人の先生方に語っていただいた。

「ほどほど志向」で耐性の低い生徒たち

――2012年度の入学生は、これまでの生徒と比べてどのような違いがあると予想されていますか。

渡辺　今の生徒・保護者は共に「ほどほど志向」が強く、上を目指そうという気迫に欠けていると思います。また、中学校でのグループ学習や発表が中心の授業から、進度が速く講義中心の授業に変わることに、対応しきれない生徒が増えているように感じます。今までより学習習慣が身に付いていない生徒も見受けられ、新課程ではこの傾向が加速するのではないかと考えています。

河村　近年の生徒は素直な半面、ストレス耐性が低く、精神的な弱さを感じます。特に本校の場合、第1志望校に届かず悔しい思いを抱いて入学してくる生徒が少なからずいます。勉強や部活動、学校行事などによって達成感を感じさせたり、我慢強さを養ったりして、高校生活の中で生徒の力を伸ばしていくことで、彼らが主体的に大学入試に取り組む力や姿勢を養うことがより大切になると感じています。

白石　生徒を見ていると、「二つの側面」を持っているように見受けられます。教師や大人の前で本音を明かさない子や、目立ちたいけれど地味に振る舞う子、もっと出来るようになりたいけれど表に出さない子。このような気質変化と併せて、学力面でも、中学校での学習内容の増加により、標準偏差がより一層広がることが予想されます。入学前後の時期に、いかに早く生徒の実態を把握し、適切な対策を取るかが、その後の指導を左右すると思います。

導入期指導は「夏までが勝負」

――学力差を広げないための指導のポイントは、低学年においてはどこにあるとお考えですか。

茨城県立竜ヶ崎第一高校
渡辺隆文 Watanabe Takanori
教職歴27年、同校赴任歴9年目。進路指導主事。国語科。茨城県立竜ヶ崎第一高校◎1900（明治33）年創立／全日制・定時制、普通科、共学／1学年約280人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、東北大、筑波大、東京大などに118人が合格。私立大には、慶應義塾大、早稲田大などに延べ567人が合格。

渡辺　本校では数年前に導入期指導の改革を行いました。その過程で強

愛知県立五条高校
河村泰親 Kawamura Yasuchika

教職歴29年、同校赴任歴19年目。進路指導主事。数学科。愛知県立五条高校◎1972（昭和47）年創立／全日制、普通科、共学／1学年約320人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、名古屋大、京都大などに202人が合格。私立大には、慶應義塾大、早稲田大、南山大、同志社大などに延べ641人が合格。

く感じたのは、「夏までが勝負」ということです。茨城県では、模試の成績が1年生の夏以降に下がるという傾向が見られ、教師の間ではそれを当たり前と捉える風潮がありました。ところが、導入期指導で学習の仕方や大学入試に対する心構えを徹底的に指導し、更に本校への帰属意識を醸成したところ、1年生の後半以降も成績を維持する生徒が増え、成績上位層が厚くなりました。11年度入試で東京大に合格した生徒は、入学当初は東京大など視野になかったのですが、1年生の夏休みに自分が7、8時間学習できると気付いたことをきっかけに、目標を高く持つようになり、入学時には考えてもいなかった大きな志望を実現しました。難関大への意識付けと併せて、1年生の夏休み前までに学習習慣の定着を図れたことが大きかったと思います。

河村　新課程においても、1年生で学習サイクルを確立することが喫緊の課題となるでしょう。本校では、1年生における国数英の家庭学習の優先順位を①予習、②課題、③復習としています。特に国語と英語は、予習をしなければ授業についていけません。授業が分からなければ、当然、課題も復習も出来ません。課題の量などは、以前は各教科がそれぞれ調整せずに課していたため、時折、期限までに消化しきれない生徒が見受けられる状況がありました。現在は、各教科で分量を調整し、生徒に過度の負担がかからないように配慮し、最後まで出来なかった生徒は学校で取り組ませるようにしています。新課程においても、生徒の状況を見ながら課題や小テストの量を調整したり、個別の指導を工夫したりする必要があるかもしれません。

中学校までの指導を否定しない

白石　元々、学力差のある生徒が入学してくる現実を考えると、1年生で学力幅を一気に縮めるのは難しいと思います。そこで発想を転換して、「学力幅を生かした指導」をすればよいのではないかと考えています。習熟度別授業は2、3年生で行うことが多いと思いますが、例えば1年生で行い、学習の仕方や生活指導も含めて、学力層ごとに育て、それぞれを伸ばしていくという指導も有効ではないでしょうか。教師の負担も軽くなり、生徒にとっても無理なく中学校との接続が図れると思います。このように、新課程では習熟度別授業をどこで活用するのかもポイントになると思います。

河村　ただし、学力層の違いにかかわらず、全ての生徒が身に付けるべきミニマムエッセンシャルズの基礎学力があるという視点は忘れてはいけないと思います。基礎学力を習得するサイクルを身に付けていなければ、次の段階である「活用」「探究」には入れません。また、成績中位層をしっかり押さえておかないと、上位層は伸びませんし、下位層も危機感を感じてくれません。本校では、類型選択（文理選択）を行う1年生の11月頃までに家庭学習の習慣付け

熊本県立鹿本高校
白石宏一 Shiraishi Koichi

教職歴12年、同校赴任歴9年目。進路指導主事。数学科。熊本県立鹿本高校◎1896（明治29）年創立／全日制、普通科、共学／1学年約280人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、大阪大、熊本大、熊本県立大などに87人が合格。私立大には、立命館大、関西大、福岡大などに延べ230人が合格。

と、苦手科目の克服を目標としています。

上位層は何もしなくても伸びると捉えずに、いつか他の生徒に追いつかれるのではないかという危機感を常に持たせるような工夫も大切です。私は2年生の担任をしていた時、成績上位層にあえて家庭学習時間を2時間までと限定し、その中でどのような学習をすればよいかを生徒自身に考えさせました。時間は際限なくあるわけではなく、受験勉強や社会においても「選択と工夫」が必要なのです。自分で優先順位を決めて効率よく学習する方法を考えさせることで追い込んでいく。このような荒療治も時には必要だと思います。

白石　新課程では、基礎学力定着のため、学習内容が大幅に増えました。それにより詰め込み主義の時代に逆戻りしないよう、いかに指導を工夫すべきかという「脱物量主義」について議論されています。河村先生の「選択と工夫」は、そのための一つの答えを示していると思います。量と質のバランスについても、新課程ではより意識が必要です。

河村　もう一つ注意しなければいけないと思うのは、生徒が中学校でしてきたことを否定しないことです。よく「中学4年生を高校1年生にする」という言い方をしますが、自分たちの経験を真っ向から否定されると、生徒は高校生活に不安を感じ、萎縮してしまいます。高校でリセットする部分と継続していく部分を明確にしておかないと、生徒の意欲を伸ばすことは難しいでしょう。

生徒は高校生になって、通学時間が変わったり、授業では学習すべき量が増え、進度が速くなったりと、さまざまな変化と制約の中でもがきます。そうした生徒の「もがき」をどこまで受け入れ、どこまで受け入れないかということの共通認識を教師間で持っておく必要があるでしょう。

文理選択の時期や方法は適切なのか

――近年、生徒の進路選択のミスマッチが増えていることが課題としてよく挙げられています。なりたい職業から学部を考え、志望校を決めるという、従来の進路選択の方法が揺らいでいるのではないかとも思えます。新課程を機にミスマッチを解消することは可能でしょうか。

白石　進路のミスマッチは、本校でも大きな課題だと捉えています。どこに原因があるのか調べた結果、文理選択の時期が早すぎるのではないかと思いました。各教科をしっかり勉強していない1年生後半に文理選択を行うことの是非について、改めて話し合う必要があるのかもしれません。

渡辺　逆に、文理分けが遅すぎると、生徒は入試を意識せず、のんびりしてしまいます。勉強に意識を向けさせるために、早めに文理選択をさせてきたという学校側の都合があった面は否めません。ただ、生徒が乗り越えるべきハードルとして、この時期に文理選択が設けられていることにはそれなりの意味があると思います。1年生が学校に慣れて気が緩み始める秋に、文理選択のタイミングで進路を考えてみることは、生徒の進路意識の醸成という観点からも大切なステップになるのではないでしょうか。

河村　私は文理選択の時に「素質と適性」の話をよくします。適性は自分でつくれるけれども、素質次第ではやっても出来ないこともあります。素質を伸ばすのには限界があるけれども、適性は自分自身の努力で伸ばしたり変えたりすることが出来る。生徒にそう伝えるのです。進路学習では、自分の素質を見つけるための「自分探し」の過程で道に迷ってしまう生徒がよくいます。そのた

め、本校では自分の適性を伸ばす「自分育て」を大切にしています。進路実現のために必要な努力をする姿勢を育むためには、1年生の文理選択は決して早すぎるとは思いません。

白石　今の社会は情報が多すぎて、生徒の進路選択の幅が広がりすぎてしまう場合が少なくありません。本来は、将来の志望をある程度絞り込んだ後に、それを実現するためにどのような進路があるのかというように広げて考えることが大切ですが、多くの場合、三つを二つに、二つを一つにというように、どんどん絞り込んでいくことに教師の意識が向いているような気がします。また、文理選択のタイミングだけでなく、なぜこの時期に文理選択をするのか、その意味を教師がしっかり認識しなければ、単に早く受験勉強をさせるためだけの文理選択になり、本当の意味での進路実現にはつながらないと思います。

渡辺　進路行事も定番化しているような気がします。今までずっとやってきたから、他校でも取り入れられているからといった消極的な理由では、形だけの取り組みとなり、単に消化しているだけということになりかねません。新課程を機に進路指導についても今一度立ち止まって考える必要があるのかもしれません。

中学校との連携を強化しよりきめ細かな生徒把握を

――お話しいただいた課題を解決するために、各校はどのような点に留意すればよいのでしょうか。

河村　一つは、保護者との連携の取り方を考えることだと思います。学習と部活動の両立、類型選択など、保護者の協力を得なければならないことは少なくありません。保護者に学校の教育方針を理解していただくことが、進路指導や行事を機能させる上で何よりも重要です。そして、そのためには学校が保護者に対して説明責任を果たすと共に、日頃から情報発信を行って保護者の信頼を得ることが大切です。

白石　本校でも保護者との信頼関係の構築に留意しています。誰よりも子どもに大きな期待をかけているのは、保護者です。しかし、教師は24時間、子どもと一緒にいられるわけではありません。保護者の協力を得ることで、学校では教師が、家庭では保護者が生徒を見守るという役割分担がもっとはっきりするのではないでしょうか。また、担任だけが生徒の責任を抱え込まないよう、学校全体、地域全体で生徒を見ることが重要だと思います。そのような仕組みをつくることの出来た学校が、生き残っていくと思います。

渡辺　加えて、中学校との連携は今後ますます重要になると思います。入学生は中学校の学習内容をどの程度習得しているのか、どのような学習観・進路観を持っているのかということをあらかじめ把握しておくことで、生徒の変化により的確に対応できるようになるはずです。教師自身が生徒の母校に足を運び、中学校ではどのような授業を受けていたのか、どのような環境で育ったのかということを知ることが大切です。

白石　この生徒は「数学が苦手」というだけでなく、「数学のどの分野でつまずいているのか」までを把握することが理想でしょう。保護者や中学校の協力を得て、中学校時代のデータを提供してもらうことも必要かもしれません。どのような悩みを抱えていたのか、教科のどの部分でつまずいていたのかといった学習や生活状況に関する詳細なデータを共有できれば、これまで点と点だった中高の指導が一本の線につながるのではないでしょうか。

河村　校内では、教科間の連携が重要になると思います。数学よりも先に理科総合でベクトルや三角関数が出てきて問題になったことがありました。12年度から数学と理科が先行実施されるのは、両方に関連する内容について、どちらの教科で教えるのか、どのような順序で扱うのかなど、教科間の連携を促す意図があるのではないでしょうか。新課程では、教科指導・進路指導の両面から教師や学校、組織の力が試されているのかもしれません。

――本日はありがとうございました。